



西別川取水計画の 顛末と農漁業 滝川康治

た。

摩周湖の麓に端を發し、根釧台地の広大な酪農地帯を蛇行しながら根室灣に注ぐ、流長七七キロメートルの西別川。アイヌ語の「ヌ・ウシ・ベツ（温泉・ある・ところ）」が西別の語源とされる。いまは水産庁のサケ・マス孵化場（標茶町虹別）になっている場所に清冽な湧き水が噴出していて、それが少し温かったことに由来した地名なのだという。

新緑の季節を迎えた五月下旬、わたしは地元の自然保護グループ「バラサンの会」（高橋昭夫代表）が開いた、西別川上流部の探索会に参加していた。

その孵化場に近い清流には、放流して間もないサケの稚魚が真っ黒い群れをなして泳ぎ、緑鮮やかなバイカモ（梅花藻）が川面にゆれる。参加者の一人が小ぶりの網を入れると、清流に棲むオシロコマやニジマスがかかっ

源流部の国有林には、アイヌの人たちがコタン・コロ・カムイ（村を司る神）と呼んだ、シマフクロウの生息が確認されている。ここは北海道でも数少ない豊かな自然が残された地だが、すぐ近くでは国有林を草地化する「国営萩野地区農地開発事業」の触手がのびる。七〇年代、国のモデル事業として開発された「新酪農村」などの取水源もまた、ここにある。

上流部では清流を誇る西別川も、下流に行くにしたがつて汚れを増す。豊かだった川の水位も下がってしまい、河口近くでも飲むことができた、かつての面影はない、と多くの住民が口をそろえる。

ここ数年、汚染に拍車をかけるように、西別川の水を延長六〇キロメートルあまり離れた釧路町まで送る、

たきかわ・こうじ
一九五四年北海道生まれ。和光大学人文学部中退。地方紙記者、酪農業などを経て、現在フリーライター。著書「幌延——核のゴミ捨て場を拒否する」（技術と人間）。

新たな取水計画が取り沙汰されている。トトリトウシ地区
国営農地開発事業」の一環として、北海道開発局釧路開
発建設部（以下、釧路開建と略）と人口約二万一千人の
釧路町が計画しているもので、住民の間に事業そのもの
を疑問視する声が強まっている。

補助事業を流用して計画変更

釧路市の中心部から国道を北に一五キロメートルほど
行った、釧路湿原の一角に「国営農地開発事業岩保木圃
場」と書かれた看板が立つ。

「帯は、釧路湿原国立公園」の普通地域に指定されて
おり、ラムサール条約登録湿地に隣接している。圃場面
積は約一七〇ヘクタールにおよぶが、付近には農家が数
件散在するだけ。規制がゆるやかなために牧草地などの
造成がすすめられ、湿原の乾燥化に拍車をかけてきた。
長年にわたって開墾の手を加えたものの、放置されたま
まの荒涼とした土地が周囲に広がっており、新造成地も
同じ運命をたどるのだろうか……。

この圃場をはじめとする草地造成などを行なう一方で、
釧路町内の畑作・酪農地帯の灌漑用水と、同町の飲料用
水などを確保するために、日量二万二千立方メートルの
水を西別川の上流部から引く——というのが、トトリトウ
シ地区国営農地開発事業」の骨子である。それは、次の
ような経過をたどってきた。

八六年、釧路町内の農家の経営規模拡大を目的に同事
業がスタートした。受益面積四八〇ヘクタール、総事業
費は二億円。このときは飲料用水の計画はなく、町内
を流れるオビラシケ川という小河川から、営農用水を引
くだけの構想だけだった。が、八九年春ころになって突
然、計画変更がなされる。

「全く経過が知らされることはなく、いきなり釧路開建
から私たちに計画変更の提示があった」

釧路町のある受益農家がこう証言するように、当事者
には何の相談もなく、「飲用水の確保」を盛り込んだ内容
へと衣替えしてしまう。

屈斜路湖に端を発して太平洋に注ぐ釧路川の水は、す
でに釧路市と釧路町が上水源にしている。が、農業補助
事業に相乗りする形で釧路町が選択した道は、身近な釧
路川ではなく、はるか彼方の西別川に水源を求める内容
隣の釧路市のベッドタウンとして人口が増えつつける同
町にとって、「摩周の名水」として知られる西別川源流部
の水は魅力的だったし、水需要を満たすには補助事業の
流用が手っとり早かったらしい。

一方の釧路開建は、「あくまで地元の要望に基づいて計
画を変更した」（農業開発課）と説明するが、統廃合リス
トにも上がる斜陽官庁にとって、大規模プロジェクトが
確保できる「地元の要望」は、願ってもないことだった
ようだ。

両者の利害が合致して、延々とパイプラインで水を引
く構想へと一転して、対象面積五四〇ヘクタール、事業
費七八億円（完成目標は九八年）の大事業へと膨れ上が
った。が、安易な計画内容が伝わるにつれて、遠く離れ
た町の基盤整備のために別の水系に影響がおよぶことか
ら、流域住民や漁業・自然保護団体の反発を招いた。

広がる環境悪化を憂慮する声

最初は、孵化場に近い場所から取水する計画が練られ、
源流部を抱える標茶町虹別地区の連合振興会（大浦忠雄
会長・二八〇戸）が、いち早く反対の声を上げた。

九二年二月、同振興会は湧水のみを水源に頼る取水計
画に対する「反対決意表明書」を町と町議会に提出。地
元住民の声を受けて、町議会は昨年三月、反対請願を採
択して取水計画に対する態度を鮮明にしている。

同振興会の前会長を務めた鈴木兼好さん（六六）は、
昭和初期、親と一緒に山形県からこの地に移り住んだ。
いまは家業の酪農を息子さんに譲り、自宅の脇に噴出す
る豊富な湧き水を利用してドナルドソン（ニジマスの一
種）の養殖に情熱を傾ける。

「昔は、この養殖場のすぐ近くまでマスやアキアジ（サ
ケのこと）が上ってきたもんだ。西別川は、開拓当時の
貴重な食糧の供給源で、我々の小さいころはヤマベやア
メマスが大変な蛋白源でした。一メートル以上のイトウ

もいた。深くて横切れなかった川も、いまじゃ浅い所は
長靴で渡れる。水源地の森を伐ってしまったのも原因の
ひとつだし、わたしらも反省するものがあるね」
と、豊かだった川をいとおしむ。この一帯は、昭和初
期の大凶作を契機に乳牛を導入して有畜経営への転換が
始まり、いまでは日本有数の酪農地帯に成長した。森林
や川の水量が減ったのは、その負の遺産でもある。
会長時代に新聞記事で取水計画を知り、住民の意見を
募って反対の声を上げた。二〇年間にわたる町議経験も
あるが、農業補助事業を使って大がかりな上水の確保を
行なう話は耳にしたこ
とがなく、「農業予算を
他の事業に安易に使
うべきではない」と訴え
る。

九〇年に別海町内の
茨散沼にリゾート計画
が持ち上がったのを契
機に発足した「バラサ
ンの会」も、早い段階
から異議を唱えている。
農業を中心にした地域
振興のあり方、自然探
勝、環境保護を三本柱



クレソンやバイカモが自生する西別川の清流（標茶町虹別で）



源流部付近の国有林を伐採してすすむ国営萩野地区農地開発事業

に活動するなかで取水問題に直面し、計画の中止を求めた。

昨年八月、同会は次のような要望書を釧路町や釧路開建に提出した。

①農業用水はオビラシケ川の水量で十分確保され、上水は釧路市からの分水で可能。釧路町は国立公園の規制などを理由に釧路川からの取水に難色を示すが、環境庁側は問題視していない。

②取水による河川機能の変化などの環境アセスメントを一〇一五年単位で行なうべきだ。

③草地造成によって釧路湿原を破壊し、取水で根室の河川環境の悪化をもたらす。農業予算は農民に還元されるべきだ。

こうした申し入れを行なう一方で、関係者への資料送付やチラシ類の配付などの地道な活動をつづけてきたことが、流域住民に計画の問題点を気づかせ、反対世論を盛り上げる陰の力になったようだ。

一方、釧路開建と釧路町は九〇年から、西別川の水利権者である別海町と別海漁協、水産庁サケ・マス孵化場などと協議会をつくり、断続的に協議を重ねてきた。開発局は昨年になって、地元の反発が強い源流部をあきらめ、取水地点をやや下流のシユワンベツ川との合流部付近（別海町内）へと移す案を打ち出す一方で、流域の植林や糞尿問題の改善策などを別海町側に示して、局面の

打開を図ろうとした。

漁協、自治体も反対して暗礁に

今年に入って、計画を疑問視する流域住民の声が加速していった。

①サケ・マスを育む母なる西別川は、根室南部漁業者にとっても重要な河川であり、この事業実施後に水質汚染が危惧され、魚の生息に影響する恐れがある。

②地球規模で環境保全が叫ばれているときであり、全道漁協婦人部が「魚付け林」として植樹活動を行なっている。西別川をモデルとして「魚を育む森づくり事業」などの自然環境復元のための手立てが計画されている。

③新酪農村事業が実施され、西別川周辺も環境が変わり、汚染された。いまは、これを当時の環境状態に戻すことが先決である。

それまで態度を保留してきた別海漁協（渡辺静次組合長・約一〇〇戸）は一月中旬、理事会で「反対」の意向を固めた。これはその理由に挙げた三項目である。

同漁協の青年部は七年から、西別川流域一〇カ所の水質調査を毎月つづけており、汚染には敏感に反応してきた。七〇年代前半まで毎年一〇万匹を前後していたサケの捕獲数が、その後一〇年あまりにわたって二一六万匹と低迷したことをみても、この時期にピークを迎えたさまざまな農業開発事業に伴う河川の汚染との関係が色

濃い。開発で痛手をこうむってきただけに、漁協側が挙げる反対理由には、これ以上の汚染を食い止めたいとの願いがよく伝わってくる。

西別川中流域で暮らす別海町の住民たちは一月中旬、「西春別・泉川の水資源を考える会」（山内昭一会長）を結成して、計画に異議を唱えはじめた。

この地域は簡易水道の出が悪く、乳牛の飼育頭数が増えるにしたがつて営農用水の確保にも困って、西別川からの取水量を増やして活路を見いだそうとしていた。そんななか、隣の虹別地区の人たちとの懇談会をきっかけに、自分たちの増水計画が釧路町の計画と一体で行なわれようとしていることを知り、

「水量や環境面からも、よその流域に供給できるだけの余力はない」（山内会長）

との機運が盛り上がりつつあったのだという。

こうした住民世論の高まりを背景に、それまでは、「環境と水質保全上から取水には基本的に反対だが、独自水源がないなど釧路町の事情は同情できる」

と、取水やむなしに傾いていた佐野力三別海町長も姿勢を転換する。二月上旬の町議会にて、

「現状では、流域住民の賛成を得られる見込みがなく、同意しかねる」

と、実質的な反対表明を行ない、住民の声を尊重していく方針を鮮明にしたのである。

こうした一連の動きによって、事業推進に大きなブレーキがかかり、西別川流域には「取水賛成」の団体はなくなってしまった。釧路開建の担当者はわたしに、「（先行きは）厳しくなったことは事実でしょう」と暗礁に乗り上げたことを認め、佐野町長も、「（流域住民の）反対の声がなくなれば、事業はOKだろうが、いまは賛成できる環境にない。事実上、取水はできないでしょう」

反対の包囲網に対して、中西雄一釧路町長は、「完全に断念したわけではない。西別川からの取水を視野に含め、関係機関と協議していく」（三月上旬の町議会答弁で）

との見解を示したが、町内では総合体育館建設工事の指名業者選定をめぐる疑惑が表面化して、今秋の町長選をにらんだ町長派と反町長派の対立が激化するなど、とても町を挙げて取水事業を推進できる状況にはない。開発局・釧路町とも当面は、着工を強行できるような環境ではなくなり、事実上の凍結状態がつづく。

陸と海を結ぶ初のシンポジウム

この問題を通じて、河川環境に対する関心が高まってきた。思わぬ開発行政の置き土産である。

「西別川―その現状と未来」をテーマに、三月中旬、別海町内で開かれた初めてのシンポジウム（主催・バラサ



流域住民が環境問題を語り合った初の「西別川シンポジウム」（別海町内で）

ンの会)は、そのことをよく物語る。ひとつの河川をめぐるとこの種の催しは全道的にも珍しく、西別川に対する住民たちの愛着の強さが伝わってくる。

パネラーの一番手は、いち早く声を上げた虹別連合振興会長の大浦さんだった。

西別岳を頂点とする丘陵地帯と、なだらかな平野からなる約一・八万ヘクタールの虹別地区は最近、道の「農村ホリデー事業」の指定を受けた。都市住民との交流を図るファームステイを試みたり、西別川を中心にした農村公園構想を練るなど、地域づくりの機運が高まっている。シンポの参加者に配られた「虹別マップ」は、住民たちが二年がかりで編集した力作だったし、そこには地域への誇りがにじみ出ている。取水計画は、そうした動きにも逆行してしまふ。

「自然を破壊しないで、子孫への贈り物にしたい——というのが農村公園の構想であり、『虹別マップ』にも大きく取り上げた清流が、永久的に尊重されるようにしなければならぬ」

と強調する大浦さんは、事業者側が計画を変更するまで運動をつづける決意を述べた。地元の小学校では、サケの稚魚を子どもたちの手で孵化・飼育して放流したり、川の清掃をやっていると。川に寄せる思いは熱い。

漁業の立場からは、北海道指導漁連の吉田東海雄根室支所長らが西別川の重要性を強調した。根室管内には一

五カ所ほどのサケ・マス増殖重要河川があり、八つの漁協の多くがその恩恵に与かっている、という。江戸時代に幕府へ送る「献上サケ」を生産した歴史をもつ西別川は、現在でも道内最大級の増殖河川なのである。

「全道で三千方匹のサケが回帰するが、そのかなりの部分を根室管内で有している。放流される億単位の稚魚は、北洋の海をずっと回り、三十五年をかけて戻ってくる。その一番の根幹になるのは、母川が自然の環境になること。科学が進んで毛利さんが宇宙に行く時代になっても、わずかな伏流水から生まれる川が汚染されると、サケはひとたまりもない」(吉田支所長)

と、川とのつながりの深さ、水の恵みの大切さを説いた。そして、二〇年前に新酪農村建設に伴って道知事と漁業者代表が交わした「覚書」にもとづき、現在もなお河川関連の工事を行なうときには、事業者と漁業団体とが事前協議を行なっている経緯を紹介した(この「覚書」は画期的なもので、柳沼武彦著『木を植えて魚を殖やす』(家の光協会)に詳述されている)。

バラサンの会事務局長で獣医の岡井健さんは、環境保全の視点から酪農のあり方を考えつづけてきた。「取水計画は、西別川を壊すことと、新規に農地造成をするために釧路湿原を壊すことを同時にやっている。農業予算でやっているが、農業者は食い物にされているだけではないか」

実態を示して見せた。

「流域の九割は牧草地であり、土砂などが直接川に流れ込んでいるところも多い。支流レベルで守らないと西別川は救えない。酪農の構造から考え直して、川から恩恵を受ける人たちが知恵と金と労力を出し合い、解決していくしかないでしょう。少なくとも、川底のはっきり見える透明度三メートルをめざしたい」

と、具体的な目標を示して報告を締めくくった。

会場の発言には、川に対する愛着と、酪農のあり方を究め直そうとする思いがにじみ出ている。

「子どもたちが西別川で遊べる環境を残し、一次産業を生かしながら生活するにはどうしたらいいか——みんな考えてはどうか」

と口火を切ったのは標津町の自治体職員だった。

「規模拡大で酪農家は一人年間三千時間を超えて働いても所得は上がっていない。根拠ではアメリカの飼料穀物を大量に与える畜産加工業のような形態が進んでいる。そうしないと補助事業が下りてこない農業振興のあり方が問題だ。石油エネルギーを浪費する終末型農業じゃなく、もつと草地に依存して地域で循環できる酪農をする必要がある。行政・農協を含めて、そういう農業を追求しないと西別川などの汚れはなくなるならぬ」

こう反省の弁と提言を述べた、農協役員をやっている別海町の酪農民。

と指摘し、酪農の大型化による環境問題について、「根室台地には小さな川がたくさんあり、農家の庭先から源流が始まるところが多く、そこが開発の対象とされている。河川の汚染は農地開発に起因するのではない。農家自身も規模拡大を追わずに、土地に合った経営をすれば、安定した生活と自然環境にやさしい農業ができるはずだ」

と、酪農のあり方に言及した。

川への愛着と一次産業のあり方

竹中健さん(北大大学院環境科学研究科)は、五年近くにわたって西別川の水質調査をつづけている。スライドを使った報告からは、開発によって痛めつけられた西別川流域の実態が浮き彫りになった。

「北海道には自然が残っている」というが、自然なんてほとんどない。タンチョウの営巣地が破壊され、エゾモモンガやクマゲラは森林が少なくなつて姿が減った。西別川上流でサケの自然産卵は数十年に一度しか見られない」

と、病んでいる実情を指摘した。川の透明度は、源流部の孵化場付近では二メートルもあるが、上流域では数メートル、中流以降になると水底が見えない状況だという。竹中さんは、水性昆虫がたくさん生息するバイカモが中流以降で姿を消して、魚の数もぐつと減っている

「子どもが小さいころ、虹別のところでサケの稚魚と一緒に見てきた。去年、久しぶりで行ってみて、川が死んじゃったと悲しい気持ちでした。緑はあるけど、それは人間がつくった牧草地の緑。川を大事にして、せめて一〇年、一五年前の姿に戻せたらなあ、と思う」

と、多くの人に取水計画の問題点を伝える必要があることを強調した女性。

「祖父は畜産兼業の漁業者で、暑いさなかに（河口から十数キロメートル上流の）孵化場あたりへ草刈りに行っても、西別川の水を飲んでたという。いまの川の姿を見て、本当に嘆かわしい」

四四歳の漁民が幼いころを述べた。若い酪農氏は、規模拡大でないマイペース酪農が地域を救う道だと訴えた。

「農家自身が交流会を開いて学ぶそのなかで、牛を減らして環境に生かされた経営と生活に変えて行くべきだ、と思うようになった。それができれば、この地を子孫にまで引き継いでいけるんじゃないか」

西別川の近くで長年酪農を営んできた人が、体験談を披露して締めくくった。

「昔は三倍くらいの水量があり、橋の上から飛び込んでも頭をぶつけるようなことはなかった。昭和八（一九三三）年の三陸津波のときは地震で井戸が埋まり、バケツを担いで川から水を汲んだが、いまではあの水を飲む気が

着工）に代表されるように、多額の予算を投じた農政主導型の大型酪農郷づくりがすすめられた。地域の酪農もまた、その流れに沿って牛乳の増産に追われ、「ゴールデン拡大」という言葉が生まれた。

四〇年におよび「酪農の急速な発達」によって、釧路・根室支庁管内の乳牛飼育頭数は一戸平均で八四頭（九三年度）、農家一戸の平均草地面積は約五二ヘクタール（同）と、国内最大の規模に達している。近年の牛肉輸入自由化に象徴される国際競争の激化に、規模拡大を図って対処しようとしたことも、数字の伸びに拍車をかけた。円高によって輸入穀物飼料が入手できたことも、安易な拡大をもたらし、多くの酪農家が抱えたものは多額の負債や労働過重、糞尿問題の発生などであり、なかなかゆとりある生活を手にできないでいる。

この地域の自然環境の悪化の原因をたどると、森林伐採による後背地の喪失と河川の水位の低下、草地開発がもたらした河畔林の減少や土砂の流入、飲料・営農用水の取水、酪農の大規模化で農地に還元しきれずに「廃棄物」扱ひされる糞尿……と、規模拡大に伴うさまざまな歪みが複雑に絡みあってきた。

その悪循環を断ち切り、失われた自然を取り戻そうとする試みが、根釧地方の随所に芽生えている。

適正規模の酪農を追求する動きもそのひとつ。外国産の輸入飼料に依存せずに、一ヘクタール一頭の飼育を基

にはなれません。（減った河畔林の代わりに）木を植える話があるが、もっとも川や木を大事にすることから始まって、植えるより伐らないことを考えるといい」

初のシンポジウムでは流域を結ぶ連絡会を結成することが決まり、住民たちは取水計画の動きを監視するかわら、西別川の自然を取り戻す活動をスタートさせた。さまざまな住民・市民運動のなかで、陸と海をつなぎ、ひとつの流域の人たちが手を携える取組みは珍しいし、わたしにはとても貴重な試みに映る。

シンポのあと、標茶町内にはシマフクロウを保護する住民グループ「虹別コロカマイの会」も発足した。源流部の生息数は推定で六羽。巣箱や給じ場の設置などの活動を行なうとか。住民の輪が広がりを見せている。

自然環境に生かされた農漁業の道

取水計画に象徴される根釧台地の環境問題は、酪農の規模拡大と密接なつながりがある。

一九五四年に制定された「酪農振興法」は、「酪農の急速な普及発達および農業経営の安定に資する」をその目的に掲げるように、規模拡大を強く促すものだった。この地方は、同法の「集約酪農地域」の指定を受けて以来、世界銀行の融資による初の機械開墾を行なった根釧パイロットファーム事業（五六年入植開始）、道の第三期総合開発計画の目玉と位置づけられた新酪農村事業（七三年

本にして、土・牛・人がともに健康で、持続性のある農業を営むことを目標に、「マイペース酪農交流会」が五会場場で開かれており、酪農民たちが積極的に参加している。糞尿を投棄してしまう酪農ではなく、環境に配慮した循環型の農業を定着させようというのである。

別海・野付両漁協の婦人部の人たちは、八八年から西別川や床丹川の近くで「お魚を殖やす植樹運動」をつづけており、息の長い取組みをつづけている。

西別川の両側五〇メートル幅に河畔林を再生させよう——と、別海町は本年度から「魚を育む森事業」をスタートさせた。まず町有地五ヘクタールから始めるが、将来は民有地も買い上げて、広葉樹を植えていく。

「流域の四〇％で植林が必要で気の遠くなる話だが、やらなければなりません。一〇年単位で実施して、面積を増やしたい」と、佐野町長が力を込める。

取水計画の顛末は、根釧台地に暮らす人びとが自然環境を見つめなおす好機となったようだ。自然は簡単には元へ戻らないし、水膨れした酪農経営を適正規模にするのは勇気のいる、時間がかかる作業だが、さまざまな立場で開発のしすぎを反省し、一次産業と自然が折り合っ

て生きる道を真剣に模索する営みがつづく。